山口牧子の輝く色彩と不思議な対象認識

山口牧子展(横浜関内ギャルリ･パリ 2022 年 9 月 2 日～10 日)を観た。会場に入ると、見たこともないような明るい鮮烈な色彩の氾濫に圧倒される。この色彩の明るさはどうしたことだろう。

山口牧子の作品は、基本的には日本画であるが、その技法はきわめて複雑。麻紙を支持体として、その裏面に寒冷紗を張って、胡粉などで裏地からの光に反射を整える。薄めた絵具を裏面に塗り麻紙の表面に滲み出させる。その麻紙をキャンバスに貼り、裏面からにじみ出た色彩を背景にして、その上に描いていくという。しかも和紙の表面を揉み、複雑な皺を作って平面にならしていく。すると表面のテクスチュアは、まるで三次元の金属物体を巨大な重みでプレスし、その上部に凹凸のある平面が生じたかのようなものになる。

この手がかかる技法によって、キャンバス地と貼った紙との間に生じた空間により、光の反射が微妙に強くなるのだろう。岩絵具が生み出す鮮烈な色彩は、ナイフで油絵具をさっと厚塗りしたのに負けない強さを持ちながら、油絵具よりもずっと明度が高く、光を孕んだものとなる。油彩の色彩がキャンバスの奥の方へと深みをもって延伸していくのと反対に、山口牧子の色彩は、貼った紙の表面から見る者の側に押し寄せてくるのだ。

この技法による明るい色彩の鮮烈さ、美しさだけでも、この作家の力量とオリジナリティーとして高く評価されるべきだろう。しかし面白いのは、表面のマチエールが導く想像の不思議なリアリティーと物語性なのである。

みなさんも廃棄された自動車の解体作業場で、色とりどりの車がプレスされ、直方体の金属塊とされていく映像を見たことがあるだろう。山口牧子の作品では、見る者とキャンバスの間にあった三次元物体が巨大な力でプレスされ、直方体の金属塊となり、その表面がこちらに現れているように感じてしまうのだ。引き延ばして復元すれば、その物体は家族や恋人を乗せた車だったかもしれないし、人々の食欲を満たした冷蔵庫や電子レンジだったかもしれない。今や薄い直方体の金属塊のようになった物体には、人と関わった歴史や物語のようなものが痕跡としてとどまっている気配がある。潰された存在物の最後の自己主張と、圧縮されて永遠に閉じ込められた時間性が、美しい色彩としてにじみ出ているように感じるのだ。

かつて存在していた三次元物体が内包していた物語性のようなものを表出させた表現。その物語は、明るく鮮烈な色彩が象徴するように、美しく悲しく、そして愛おしいものだろう。この物語性によって、色彩は懐古の情や、逆方向の未来に向けた希望や夢幻性を紡ぎだす。

現代絵画は、長いことこの物語性を忌避してきた。しかし、人間の内部に巣食っている暗部を抉り出す表現主義的なアプローチも、今や、色褪せた。現代社会では、リアリティーの方が芸術家の表現主義的な表出よりもずっと凶暴、嗜虐的で醜悪であるからだ。そのようなものよりも、眺めていて飽きずに愛おしい懐かしさや美しい夢幻に浸れる作品の方を求めたいと思う。

山口牧子の一見、抽象的に見える画面は、何か実在する事物の解像度を下げて、その「存在」の本質を表出させようとするアプローチではない。ペシャンコに押しつぶされようが滲み出てこずにはいられない、「存在」物の美しい物語性や情念のようなものを、輝きを宿した鮮烈な色彩で表出させようとしているのだろう。

このような繊細な物語性は、写真では再現しようもない。実際に作品の前に足を運び、ゆっくり、しみじみと眺めてみなければわからないと思う。彼女の個展に足を運んでみることをお勧めしたい。

大島幸治：思想史研究者　博士(経済学)